

オ 国語基礎力の変遷

(7) 調査問題の変遷

年度	全体構成	基礎力問題番号と主な内容	配点	備考
昭和40年度	6問構成 ① 評論 ② 国語基礎 ③ 文学史 ④ 詩 ⑤ 国語基礎 ⑥ 古典	② 対義語に関する問題 ⑤ 品詞に関する問題	8点 16点	古典 有 詩 有
昭和41年度	4問構成 ① 評論 ② 国語基礎 ③ 小説 ④ 古典	② 漢字の読み・書き取り	10点	古典 有
昭和42年度	3問構成 ① 国語基礎 ② 評論 ③ 国語基礎	① 漢字の読み・書き取り・四字熟語・対義語・語句の意味 ③ 指示代名詞・副詞・音便・形容動詞の活用形・動詞の活用・敬語・送り仮名・助詞・助動詞・連用修飾・補助の関係・句点	36点 30点	古典 無 詩 無
昭和43年度	4問構成 ① 国語基礎 ② 評論 ③ 詩 ④ 国語基礎	① 語句の読み・書き取り・意味・筆順 ④ 文法問題（活用の種類・活用形・副詞・助動詞・助詞・連体修飾）	30点 18点	古典 無 詩 有
昭和44年度 ） 昭和46年度	4問構成 ① 国語基礎 ② 評論 ③ 韻文 ④ 国語基礎	① 漢字の読み・書き取り・語句の意味 ④ 敬語・品詞・活用・文の構成など	24点 20点	古典 無 韻文 有
昭和47年度 ） 昭和52年度	3問構成 ① 国語基礎 ② 評論または小説 ③ 韻文	① 語句の読み・書き取り・主語・品詞の識別・接続詞・活用・動詞・副詞・助詞・助動詞など	40点	古典 無 韻文 有
昭和53年度	3問構成 ① 国語基礎 ② 古典 ③ 評論	① 漢字の書き取り・漢字の読み・熟語・動詞と補助動詞・助詞と助動詞・副詞など	40点	古典 有 韻文 無

昭和54年度 ） 昭和55年度	3問構成 ①国語基礎 ②小説 ③古典	① 漢字の書き取り・漢字の読み熟語・接続詞・修飾・活用の種類・品詞など	40点	古典 有 韻文 無
昭和56年度 ） 昭和62年度	3問構成 ①国語基礎 ②小説 ③古典	① 漢字の書き取り・漢字の読み熟語・漢字の成り立ち・品詞判別・主語・接続詞 ※昭和56年度以降、大問1に基礎力だけではなく、文章の読解問題が加わり、次第に配点が増える。 《大問一中の基礎力の配点》 昭和56年度(34/40点) →昭和62年度(26/40点)	※ 40点	古典 有 韻文 無
昭和63年度 ） 平成18年度	4問構成 ①評論 ②国語基礎 ③小説 ④古典	② 漢字の書き取り・読み・四字熟語・助動詞・品詞判別活用など	20点	古典 有 韻文 無 国語基礎力問題が再度独立
平成19年度	4問構成 ①評論 ②小節 ③国語基礎 ④古典	③ 漢字の書き取り・読み・送り仮名・会話文	30点	古典 有 韻文 無

(イ) 出題の変遷から読み取れる特徴

- (a) 昭和40年度以降は文章を用いた国語基礎力の問題が出題され、重要視されていた。
- (b) 昭和40～43年度は出題傾向が毎年変わっており、試行錯誤が続いていたと思われる。
- (c) 昭和44～46年度は国語基礎力の問題が2題出題され、配点も高い。
- (d) 昭和47～62年度は大問1で国語基礎力が扱われている。ただし、昭和56年度以降は次第に文章の内容に関わる出題が多くなり、基礎力の占める割合は減る傾向にあった。
- (e) 昭和63年度以降は国語基礎力が再度独立した。配点は20点と固定され、文章は用いず、小問集合の形となった。
- (f) 平成19年度より大問2の割合が30点に増え、小問集合だけでなく、会話文を用いた出題となる。

(ウ) 時代によって特徴的な問題

a 昭和42年度③

問1 「指示代名詞はどれですか、抜き出して答えなさい。」

問3 「文中で用いられている動詞の音便は二種類あります。その種類の名称をかなで答えなさい。」

問10 「文法的に助動詞の用い方が間違っているところが一カ所あります。上についている動詞とともに抜き出して訂正しなさい。」(解答：見れる→見られる)

問13 「補助の関係の文節があります。それを抜き出して答えなさい。」

問14 「文中、句点を取ると意味は変わるが、文意が通るところはどこか。句点の前の二字を抜き出して答えなさい。」(解答「待つ」：授業を待つ。私の席からは....)

b 昭和43年度¹

問四 次の漢字の筆順として正しいものを、例にならって符号で答えなさい。

c 昭和44年度³

問七 撥音便の形になっている言葉はどれですか。それを含む文節を抜き出さなさい。

d 昭和48年度¹

問六 ～①の文の組み立ては次のどれに当たりますか、符号で答えなさい。

ア、短文 イ、複文 ウ、重文

e 昭和52年度¹

問七 文中の二重傍線 a 「さしでがましい」は「さしで」という語に「がましい」という語がついてできた言葉である。この「がましい」のような語を何といますか。

f 昭和56年度¹

問四 「山」のように、事物や現象を描くことによって作られた漢字のことをいう。

「河」のよう、一方の部分が音を、他方が意味を表している漢字のことをいう。

(i) 国語基礎力のうち正答率の低い問題(昭和42年度, 昭和52年度, 昭和62年度, 平成9年度)及び指導上の留意点の記述

a 昭和42年度

(a) 正答率の低い問題一覧

分野	設問内容	正答率
語句の読み	緩衝(かんしょう)	24.0%
	漸次(ぜんじ)	25.5%
	示唆(しさ)	38.0%
	奉(たてまつ)る	46.5%
書き取り	しゅうしゅう(收拾)	11.5%
四字熟語の完成	絶 ^体 絶命	35.5%
	自 ^暴 自棄	21.5%
	五里 ^霧 中	38.5%
反意語(対義語)	正式←→ ^略 式	11.5%
	興奮←→ ^鎮 静	35.5%
	軽率←→ ^真 重	40.5%
語句の意味(選択式)	自負する	23.5%
	足が出る	43.5%
	気が置けない	13.0%
音便	撥音便・促音便	23.5%
動詞の活用(力行上一段)	起き	22.0%
動詞の活用(仮定形)	答えれ	16.5%
誤用の指摘	見れない→見られない	24.0%
助詞の用法(体言)	の	14.5%
修飾・被修飾	ゆっくり	44.0%
補助の関係	みよ	1.0%
修飾・被修飾	待つ	17.0%

(b) 昭和42年度学力調査分析資料(P18, 19)より引用(…部分は省略箇所)

…漢字の読みや語彙の多少や語句の意味や、語法(口語)などは実生活や読書の中で習得されるものが多いであろう。その中にはゆがみや誤りが多いわけだから、もちろん学校教育はそれを期待して手をこまねいていてよいものではなく、是正への努力はなされな

けれどもならないが、実社会の慣習や動きの影響は見逃すことはできないと思われる。

…新聞は現象をジャーナリスティックに取り上げており、規範意識をもたないから、誤用を誤用としないのはやむを得ないが、そういう新聞に無条件降伏をしがちな生徒に対して、学校教育は国語教育における国語の教師は厳たる規範的態度を持すべきであろうと思われる。

…戦後、当用漢字や現代仮名遣いの制定によって、生徒の負担はずいぶん軽減されたが、その反面に正書法に対する厳しい態度は失われた。これは生徒のみならずわれわれ国語の教師、一般の教師を含めた大人全体にも言えることである。

…句読点の正確な表記は、新聞などでは戦後初めて徹底したことであるだけに、歴史が新しいけれども、現在他の文書がすべてこれを正確に表記しているからには徹底するよう指導すべきである。

b 昭和52年度

(a) 正答率の低い問題一覧

分野	設問	正答率
書き取り	しゅしゃ(取捨)	35.5%
	しょうーする(称)	35.0%
	ふうーじる(封)	47.5%
語句の読み	臨床(りんしょう)	41.5%
反対語	怠惰←→ <u>勤勉</u>	10.0%
接尾語を用いた語の作成	ーがましい	30.0%

(b) 昭和52年度学力調査分析資料(P12)より引用(…部分は省略箇所)

…当用漢字の全部が読め、教育漢字の全部が使いこなせることは、単なる指導目標ではなく、生徒の到達すべき目標なのである。我々はもう一度漢字指導の在り方を考え直す必要があるのではないだろうか。生徒は当て字は書いても、一字一字はよく書けているのである。一字一字の字画指導も大切だが、それを基礎にした語彙指導こそ漢字を「使いこなす」ことにつながると思われる。

c 昭和62年度

(a) 正答率の低い問題一覧

分野	設問内容	正答率
書き取り	きんこう(均衡)	17.5%
	いっかん(一環)	1.5%
活用の種類	下一段活用	49.5%
副詞の呼応	およそー <u>存在しない</u>	45.0%

(b) 昭和62年度学力調査分析資料(P12)より引用(…部分は省略箇所)

…漢字は表意文字である。だから、字形と意味との結び付きは必要に応じて教えるべきものである。また、文章中での前後の文・語句とのかかわりで読んだり、理解をしたりすることも大切である。

…最近の子供たちは「書く」機会が少なくなり、「書く」ことが苦手であるとよく言われる。文法を丸暗記するだけでなく、実際に自ら文・文章を書いて理解することが必要であろう。そのためには、指定した言葉を用いて短文を作らせるというのも有効な一方法である。

d 平成9年度

(a) 正答率の低い問題一覧

分野	設問内容	正答率
書き取り	かいとう(回答)	23.3%
擬態語の意味	ほのぼの・つやつや	38.3%

(b) 平成9年度学力調査(2)大問2指導上の留意点(P17)より引用

- ・同音異義語や類似形語の書き分けのための字義の理解が今一步である。
- ・慣用表現について感覚的にはとらえられるが、実生活における生きた言葉となっていない。
- ・擬態語や擬音語の語感がきちんと把握されていない。

(c) 全体を通じて読み取れること

- a 昭和42年度の分析資料からは、戦前の国語教育との差異を教師が感じ取っていることが読み取れる。
- b 漢字の書き取りについては、同音異義語の誤答の多さ、熟語の当て字の多さなど字義に基づいた指導の必要性が昔も今も言われ続けている。
- c 文法問題は正答率が低い。

(d) 学習指導要領における「言語事項」扱いの変遷

<p>昭和35年度 (昭和35年10月施行)</p>	<p>現代国語 B 以上の聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの学習を通して、ことばに関する次のような指導を行なう。 (1) 次の事項について指導する。 ア ことばには一定のきまりがあつて、思想、感情、知識、情報などを伝達するはたらきのあることについて理解すること。 イ ことばには生活や文化を築くはたらきや役割のあることについて考えること。 ウ 話しことばと書きことばとの関係について考えること。 エ 地域、社会、男女などによることばの違いや使い分けについて考えること。 オ 国語の変遷のあらましにもふれ、現代の国語の特質を知り、国語の改善についても関心をもつこと。 カ 語句を豊かにし、その意味と用法を身につけるとともに、国語の表記のしかたについて理解すること。 (2) 指導にあたっては、次の点を考慮する。 ア ことばに関する事項は、機械的な暗記に陥らないようにし、理解と表現に役だつ知識となり、さらに態度や習慣として身につくように指導する。 イ ことばのきまりの指導は、中学校で習得したことがらをさらに深めることとし、特に文章や文の組み立てを確実に理解し、表現できることに重点をおいて指導する。</p>
<p>昭和45年度 (昭和48年4月施行)</p>	<p>現代国語 (8) ことばに関する事項については、次の事項に配慮して指導するものとする。 ア 文章、文、語句などについては、中学校の指導の上に立って、内容のA、B、Cの指導の中で深めるようにすること。 イ 言語の役割、国語の変遷、国語の特質などについては、主として内容のBの指導の中で触れるようにすること。 ※「言語事項」としては独立せず、「読むこと」「書くこと」などに含まれている。</p>
	<p>国語 I [言語事項] 国語の表現と理解に役立てるため、次の事項について指導する。 ア 文章・文の組立てや語句のはたらき、国語の表記の仕方などを理解すること。</p>

<p>昭和53年度 (昭和57年4月施行)</p>	<p>イ 文語のきまり，訓読のきまりなどを理解すること。 ウ 語句の意味，用法などを理解し，語彙(ごい)を豊かにすること。 エ 当用漢字の読みに慣れ，主な当用漢字が書けるようになること。 オ 言語の役割，国語の特質などを理解すること。</p> <hr/> <p>(3) 内容の〔言語事項〕の指導に当たっては，次の事項に配慮するものとする。 ア 中学校の指導の上に立って，内容のA及びBの指導の中で深めるようにすること。 イ 文語のきまり，訓読のきまりについては，文章の読解に即して行う程度とすること。</p>
<p>平成元年度 (平成6年4月施行)</p>	<p>国語 I 〔言語事項〕 国語の表現と理解に役立てるため，次の事項について指導する。 ア 文章や文の組立て，語句の働き，表記の仕方などを理解すること。 イ 文語のきまり，訓読のきまりなどを理解すること。 ウ 語句の意味，用法などを理解し，語彙(い)を豊かにすること。 エ 常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字が書けるようになること。 オ 言語の役割，国語の特質などを理解すること。</p> <hr/> <p>(4) 内容の〔言語事項〕の指導に当たっては，次の事項に配慮するものとする。 ア 中学校の指導の上に立って，内容のA及びBの指導の中で深めること。 イ イについては，文章の読解に即して行う程度とすること。なお，口語のきまり，言葉遣い，敬語の用法などについても，必要に応じて扱うこと。</p>
<p>平成10年度 (平成15年4月施行)</p>	<p>国語総合 〔言語事項〕 話すこと・聞くこと，書くこと及び読むことの指導を通して，次の事項について指導する。 ア 目的や場に応じた話し方や言葉遣いなどを身に付けること。 イ 文や文章の組立て，語句の意味，用法及び表記の仕方などを理解し，語彙を豊かにすること。 ウ 常用漢字の読みに慣れ，主な常用漢字が書けるようになること。 エ 文語のきまり，訓読のきまりなどを理解すること。 オ 国語の成り立ちや特質，言語の役割などを理解すること。</p> <hr/> <p>(5) 内容の〔言語事項〕については，次の事項に配慮するものとする。 ア 中学校の指導の上に立って，内容のA，B及びCの指導の中で深めること。 イ エについては，読むことの指導に即して行う程度とすること。なお，口語のきまり，言葉遣い，敬語の用法などについても，必要に応じて扱うこと。</p>